

# 「亜麻の栽培」復活で地域に活力

## ―産学官の連携事業により雇用創出も―



有限会社亜麻公社 執行役員  
株式会社北国生活社 代表取締役

● 内藤大輔

北海道でかつて栽培されていた亜麻の栽培を復活させ、収穫した種子から油を搾り健康食品分野で商品化をする――。「北海道亜麻ルネサンスプロジェクト(PJ)」と名づけた、こうした事業に着手してから十年余が経過した。

単なる地域おこしではなく、事業化して利益を生み雇用創出にもつなげる仕組みでないと一過性に終わると考え、取り組んできた目標がようやく定着してきた。以下、手さぐりで取り組んできたPJの奮闘の顛末を紹介したい。

### 亜麻栽培は北海道が最適地

東京での商社勤務を辞め、大学時代を過ごした北海道に戻り、就農を目指して農業研修をしていた二〇〇〇年。地元建設コンサルタントの社

長・橋本眞一氏と出会い、亜麻事業の企画書作成をアルバイトとして受けた。これが私と亜麻との最初の接点である。

亜麻について調査を進めると、①明治初期から戦後まで亜麻繊維産業が北海道を中心に展開されていた②亜麻は梅雨のない冷涼な気候を好む③栽培に大規模な面積を要する――ことなどが判明し、日本では北海道が最適であると認識した。

また、亜麻の種子に含まれる油脂の主成分が、不足しがちなホルモン様物質の材料である「オメガ3系脂肪酸」という種類であることも分かった。オメガ3は、予防医学の先進国アメリカの健康食品市場で大きなシェアを占めていた成分だ。

このことから、北海道で亜麻栽培を復活させ、収穫した種子から油を

搾り、健康食品分野で商品化をする「北海道亜麻ルネサンスPJ」として事業化した。二〇〇一年から私が専任でPJがスタートした。

当面の課題は、国内で四十年以上プランクのある亜麻栽培の復活、体系化であるが、段階的に様々な課題が挙がり、それらを一つひとつ時間をかけ、おおむね以下のように解決していった。

国内で栽培試験するための種子が手に入らなかったため、商社時代のついでに北欧から輸入した。栽培に関する資料が古いものしかなかったが、漢字カタカナ交じりの古い日本の文献を読み下す一方、欧米から英語文献を手配した。

栽培試験に協力できる農家も農地もなかったが、三十軒以上農家を回り、やっと当別町の大塚農場の協力を得た。

### 商品目標は健康がキーワード

亜麻↓麻↓大麻という誤解の連想から、通報されそうになったこともあったが、栽培地での美しい花をPRしたり、園芸目的に亜麻の花の種を配ったりすることで少しずつ啓蒙を進めた。

このようにして、ようやく栽培体

系を構築するためのスタートラインに立った。商品目標が健康をキーワードとするものであったため、栽培に農業を使いたくなかった。

一方で持続可能な農産物とするためには農家の労働量を極力減らし、それに見合う対価を一定のリスク以内で保証しなくてはならない。そのため栽培体系を極力機械化する努力をした。

新しい専用の機械を買う余裕はないので、農家が既に持っている機械を転用できる方法を考え、アタッチメントを自作したり改造したりした。極力機械除草できる体系を考え、害虫対策は試行錯誤の末、松脂とアルコールをベースにした有機資材を使用した。

農業は一年に一回しかトライアルできない。さらに毎年、気候条件が変わる。PJ開始当初は、来る日も来る日も炎天下で草取りし、害虫と闘った。

こう書くとおそろしなものだが、全く先が見えない中、多くの人に助けられ励まされ、一步一步に進んでいるのか分らないくらいゆっくりと進んできた。

しかし、毎年確実に経験が蓄積されて、大塚農場を中心に生産者組合

紹介などで支援をいただいた。

### 地元メディアでも紹介されPR

予算が潤沢にある自治体などにもないが、当別町は予算を使わなくてもできることを工夫し、可能な限り支援をしてくれた。この取り組みは、地元メディアにも取り上げられ、効果的なPRができていく。

まだまだ課題は多いが、今後も日本でも唯一の亜麻産地として、当別町の地域づくりを産学官の連携で作りに上げていきたい。もちろん私たち「民」主導で、私は地域づくりも産学官連携も、それが目的ではなく結果でなければ長続きせず、長続きしなければ意味がないと考えている。

\*「亜麻まつり」は今年も七月十日に開催される。

亜麻の里HP

<http://www.amanosato.jp/>



廃校を利用した「亜麻まつり」の様相



亜麻畑を見学する来場者たち



亜麻の花



亜麻油を使った健康商品群